

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (163)

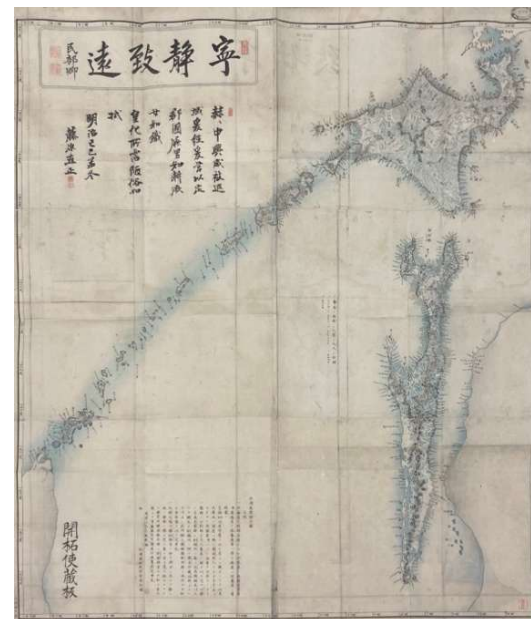
2025 年4月の作品は
「北海道國郡全圖」「蝦夷國全圖」
—地名の遷移—

展示テーマ

～今の北海道の地名ができるまで～

今日も北海道各地にはアイヌ由来の地名がたくさん存在している。このことは、道内においては周知の事実だが、本州ではそこまで知られていないようだ。北海道の県庁所在地である札幌の「サッポロ」という音は日本語にはあまり馴染みがないだろう。他にも、積丹（シャコタン）、音威子府（オトイネップ）、占冠（シムカップ）、長万部（オシャマンベ）など変わった読みの地名が多くある。このどれもがアイヌ語由来とされている。

第 147 回展示では、ふたつの北海道の古地図を比較したが、本展示では北海道の現在の地名がどのようにして現在の形になっていったのかを考えてみたい。地名が本来どんな意味を持つ言葉であったのか、どこから名付けられたか、どのように変化していったのか、古地図やその他の資料を通して探っていききたい。



『北海道國郡全圖』

(1 枚)

明治時代、明治 2 (1869) 年

作者：松浦武四郎^{たけしろう} (1818～1888)

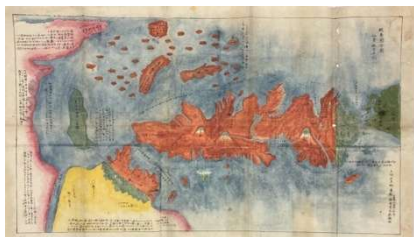
版元：開拓使蔵版

縦 106cm×横 91cm

明治 2 年に松浦武四郎によって作成されたものである。武四郎は 16 歳の時に故郷を離れて、日本全国を隅々まで渡り歩い

た。唐（中国）や天竺（インド）にも渡ろうと志していたが難しかったことから、当時、流人の島として世間から疎外されていた蝦夷に渡り、6 回にわたって道のない山野に分け入り、今は異国となった樺太まで足を伸ばしたと言われている。時には刺客に付け狙われながらも、北海道開拓における最も重要な人物として活躍した。また、武四郎は北海道の名付けの親とも言われる。

明治新政府は、蝦夷地を正式に日本の領域に組み入れる際に、古代律令制の時代に設定された「五畿七道」にならって、蝦夷地に「道」名をつけようと企図した。明治 2 年、武四郎は日本書紀や古代中国の文献などを引用して、「日高見道」「北加伊道」「海北道」「海島道」「東北道」「千島道」の 6 案を提案した。北海道の元になった「北加伊道」は、武四郎がアイヌの長老から『「カイ」とはこの国に生まれた者、すなわちアイヌ民族を指す』ことを聞き、「北にあるアイヌ民族が暮らす大地」という思いを込めて名付けられたものだと言われる。蝦夷地の調査を重ねるごとにアイヌの人々への親近感が高まり、アイヌの人々が安心して暮らすことができる社会の実現を目指したい思いが強くあったのだろう。北海道開拓の際にアイヌの人々の権利を守りたいと奮闘した人物である。



『蝦夷國全圖』（1枚）

江戸時代、天明5（1785）年

作者：林子平（1738～1793）

縦 54cm×横 94cm

この作品は江戸時代後期の天明5年に、林子平によって作成されたものである。北海道図としては初めての単独刊行図である。子平は長崎に遊学し、海外事情も学び海防にも心を注いだ人物である。この「蝦夷國全図」は『三国通覧図説』の中の図、5枚のうちの1枚の写しとされる。

展示のみどころ

～アイヌ語地名～

北海道にはアイヌ語が語源と考えられる地名がたくさんあるので、今回は北海道の地名に多く用いられている「別」「内」、そして「札幌」の語源について取り上げる。

<ポロ>

ポロ 大きい、多い。

ポン 小さい、少ない。

札幌は元々「Sapporo」ではなく「Satporo」であった。サツ（乾いた）・ポロ（大きい）・ペツ（川）、あるいはサツ・ポロ・コタン（部落）がおそらく省略された形で、今の豊平川、原名「Satporo」から名付けられたと考えられている。

<別と内>

別 ペツ 川。一般には大きい川。

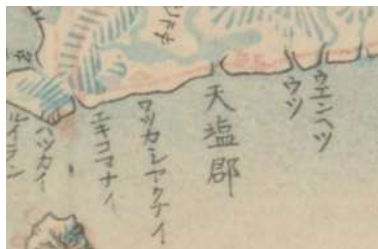
・登別 ヌブル・ペツ 水色の濃い・川

・幌別 ポロ・ペツ 大きい川

・猿別 サル・ペツ 葭原・川

内 ナイ 川。一般には小さい川。

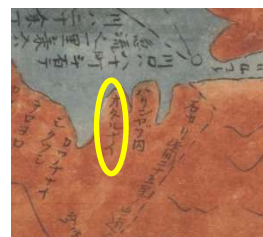
・稚内 ヤム・ワクカ・ナイ 冷たい・水の・川



・札幌 サツ・ナイ 乾く・川

・振別 フレ・ナイ 赤い・川

北海道の地名の三分の一が、別（ペツ）もしくは内（ナイ）がつくそうだ。アイヌの人々にとって、川は食べていくために最も大切なところと考えられた。大切な食糧である魚を獲る場所であり、海に出るのにも山に狩猟に行くのにも植物食糧の山菜を撮りに行くのにも川が利用された。ちなみに、内地（いわゆる本州）の日本語地名は、田のつく地名が多い。農耕文化を中心とした生活を和人が行っており、田んぼは彼らにとって食べていくための最も大切なところであったのだろう。



左の画像にある「オタルナイ」は、もしかすると現在の小樽の元となった川のひとつの名前かもしれない。

また、右の画像にある「ユウベツ」はおそらく現在の夕別の元になった地域の名前だろう。「蝦夷國全圖」は形も地名も今とは異なるものばかりであったが、少しでも現在に繋がっているような地名も確認できた。



参考文献

- ・更科源蔵、吉田豊訳(2018).『アイヌ人物誌：松浦武四郎原著『近世蝦夷人物誌』』・青土社
- ・北海道博物館[ほか]編(2018).『松浦武四郎：幕末維新を生きた旅の巨人：一見る、集める、伝える』・勝毎光風社
- ・山田秀三(1982-1983).『アイヌ語地名の研究—第一巻』・草風館・山田秀三著作集

あとがき ～貴重資料に触れて～

私の地元の北海道の面白さをより感じる機会になったし、第147回と今回で2回分のリーフレットを作成したにもかかわらず、調べたこと全てを書ききれたわけではなく、どうまとめて厳選して書こうかと悩みながら取り組んだので、大変でしたが本当に楽しかったです。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。

※過去の展示はオンラインでも公開中です！

※第164回展示は令和7年5月上旬からを予定しています。



令和7年4月1日発行
 令和元年度 日本文化論 A 受講生 編集
 236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2
 横浜市立大学 学術情報センター